東南アジア考古学会 2022 年度オンライン企画：
TAIWAN 考古学セミナー・シリーズ《台湾考古学の新視点》
第 5 回：2023 年 3 月 4 日（土）14:30-15:30 (日本時間)

台湾新石器時代鵝鸞鼻第一遺跡における貝製品工房跡と生産消費システムに関する予備的考察

邱 鴻霖
國立清華大學人類學研究所
30013 台灣新竹市光復路二段 101 號
Chiu_alex@hotmail.com

要旨

考古遺跡における貝類の遺存と製品から、環境変化や人間の資源利用、適応、移動ルート、加工技術、芸術・象徴的意味などを明らかできる。15 万年前にすでにホモサピエンスが貝を加工していた証拠が発見されている。台湾先史時代において専業的な貝製品の生産／加工が存在したことは、宋文薫による鵝鸞鼻遺跡の発掘報告書において示唆された（宋文薫 1967）。連照美の論考「台灣史前時代貝器工業初探」では、貝製品を「道具」、「装飾品」、「貝素材」と「廃材」とに分類し、さらに、先史時代における玉器生産の年代や地理的位置、製作技術とを比較したうえで、玉石器の生産が発展する同じ時期に、貝の産地において貝器生産／加工が発展したと考察している（連照美 2002）。陳有貝は、台湾と琉球列島の先史時代の関係について論じる中で、台湾が貝製品の原材料を有しながらも、琉球列島のような複雑な貝生産／加工の技術を有しなかったと結論付けている（陳有貝 2014）。

今回発表する鵝鸞鼻第一遺跡の貝製品工房跡は、台湾の南端部に位置する大規模遺跡であり、帰属年代は 4 千年前と古く、土器や玉石器、骨角器、貝製品などの遺物の出土に加え、石棺や貝塚、炉跡などの遺構が検出されている。中でも貝製品に関する出土資料が最も重要である。4 千年前は先史オーストロネシア語族の移動・拡散が最も活発に行われた時期と考えられ、貝器（貝製品）を有する文化は、その重要な特徴の一つとされている（Bellwood 1997; O’Connor & Veth 2005; Bulbeck 2008）。したがって今回の資料は、従来認められなかった貝製品の生産／加工と消費システムを解明する証拠となる。さらに、琉球列島や東南アジア、太平洋諸島との比較により、新たな研究視野や研究テーマが生まれることが期待される。

今後、貝製品の型式学的な比較により、周辺地域との関係について手かがり

を求め、そして、加工技術、概念の復元のため廃材を詳しく分類しながら、顕微鏡での観察や実験考古学の手法を用いて、加工痕跡と廃材、製作道具のパターンをモデル化し、各種類の貝とそれらの独自な加工プロセスを明らかにする。さらに地球科学的な分析方法を試み、環境と流通ルートなどの可能性を検討していく。研究の大きな目標として、貝製品に関する加工技術や環境適応、文化概念の流通の検討を通じ、ひいては、新たなオーストロネシア拡散理論の基礎となることが期待される。